

L・ブリッセ『ポーランの「新フランス評論」』

飯田, 伸二

<https://doi.org/10.15017/8784>

出版情報 : Stella. 22, pp.131-133, 2003-12-26. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

L・ブリッセ『ポーランの「新フランス評論」』

飯田伸二

ローランス・ブリッセ著『ポーランの「新フランス評論」』¹⁾の狙いは、そのタイトルが明示しているように、20世紀フランス文学の殿堂ともいえる文芸雑誌「新フランス評論」(NRF)においてジャン・ポーランが編集長として果たした役割を多角的に解明することにある。そして、この主題にかんして3部7章からなる本書は読者の期待に十分に答えていると言えよう。なぜならば NRF におけるポーランの地位の推移(第1部・第1章「NRFの編集」)、文芸誌一般のあり方・編集について彼が抱いていた独自の哲学(同第2章「文学戦略」)、編集長としての仕事振り(第2部・第1章「雑誌の検討」)、NRFに寄稿したきわめて多種多様な作家たちとの関係(第3部・第1章「影響を与える職人芸」、特にエチャンブル、ポンジュとの確執や、アルトーへの援助)、隠れた才能を見いだす探検家=批評家としての嗅覚(同第2章「ジャン・ポーランあるいは読者」)などについて、自在な資料考証にもとづき、具対的かつ示唆に富む論述を展開しているからである。さらには NRFの編集と並行しながら、あるいは同誌の休刊中に、ポーランがガリマール社とは直接関係のない雑誌(『ポエジー』『コメルス』『ムジュール』『コンフリュアンス』『メサージュ』)の編集に関与したさまを最新の研究成果をもとに描き(第2部・第1章)、それによって20世紀フランスの文壇事情を複眼的に描写することに成功している。

かたや大多数の新人作家が文芸雑誌への投稿を経ずに自著を直接世に問い、出版サイドのほうも新刊の紹介にあたっては新聞、書評誌、とりわけテレビ・ラジオを重視する今日、文芸雑誌全般がブルデュエ的な意味での〈文学という場〉で果たす役割は、ポーランが雑誌作りに情熱を傾けていた時代と比べれば著しく減少し、それにあわせて文壇(la communauté littéraire)の姿も大きく変容している²⁾。こうした事情からすれば、『ポーランの「新フランス評論」』は単に20世紀フランス文学史だけでなく、広く文化史や文学の社会学にも貴

重な貢献をするものと言えよう。

しかしながら本書のメリットは未刊資料や書簡、関係者の証言などを精査することにより、ポーランを中心に据えた文壇の緻密な見取り図を描くことに留まらない。なぜなら著者はさらに一步踏み込んで、ポーランの雑誌作りを支える文学観に迫るため、必要に応じてポーランの著作の読解に挑んでいるからである。いわば作家ポーランと編集者ポーランとを総合的に捉えようとする試みである。こうした本書の姿勢がもっとも鮮明に読みとれるのは第1部・第3章の「NRFの花」と第2部第2章の「雑誌の詩学」である。

「NRFの花」でブリッセは、NRFを「絶えざる調停」の場とするポーランの編集方針に、かつて作家が『タルブの花』で試みたのと同様の姿勢を認めている。シュルレアリストに代表されるテロリストたちが、新しく強力なアイデアは表現上の規則・法則を無視するリスクを負い、独自の斬新な言語を構築すべしと訴えたが、これに対してポーランはレトリックを復権させ、彼らとの調停を計ろうとしたのだ。さらにブリッセは「NRFはポーランにとって雑誌以上の存在だった。それは彼の作品の実験の場でもあった」³⁾と述べることによって、編集者の仕事が彼の言語観にも大きな影響を与えたとする興味深い示唆をおこなっている。ただし、この点については議論が十分に掘り下げられていないのがやや残念である。

「雑誌の詩学」でブリッセは、ポーランが雑誌作りに注いだ情熱の一大説明因子を、書物との対比を通して浮かび上がらせようとする。著者によれば、始まり、中心、そして終わりを備え、すでに一冊の書物として出来上がってしまった単行本と比較して、協同作業からなり、多くの場合作品の抜粋しか掲載できない雑誌は、より多くの実験的な要素を保持することができる。つまり、つねに作家や作品の口ごもり、ざわめきを認め、それに適った場所を与えることのできるメディアなのである。さらにブリッセは、雑誌というメディアにたいするこのような見解を『キュービズム絵画』『フォートリエ、激怒した男』などの画家論と交叉させつつポーラン独自の美学に迫る。つまり彼の雑誌作りを支えている美学として、未だに決定的な形を取っていない〈開かれた作品〉、未完成の作品に対するポーランの偏愛を指摘するにいたるのである。

これについてブリッセは、ポーランが常々、NRFの掲載拒否にあった作品原稿のアンソロジーを編むという企画をガリマール社に提案していたエピソード

ドを伝え、企画の意義を説明する彼の言葉を紹介している——「これらの作品こそがもっとも刺激的なのです。それらはあなたにもう一度やり直そうという気を起こさせます。あなたに手を加えるように促すのです。あなたを文学の真ん中に投げ出すのです。いい書物がしばしば冷たく、いずれにせよ怖じ気づかせるのとは反対に」⁴⁾。傑作ではなく、いわゆる駄作特有の美德をたたえている点に、ポーラン得意の韜晦の術が読みとれないではない。しかしブリッセがこの証言でとりわけ注目しているのは、「もう一度やり直す」「手を加える」という言葉に、生成としての文学、運動としての文学にたいするポーランの並々ならぬ関心が垣間見える点にほかならない。

NRF 編集長としてのポーランをその多様性において捉えるため、ブリッセは作家としての活動を捨象せず、その著作にも十分な注意を払っている。たしかに、本書で展開されているテキスト読解は、これまでの研究の枠組みに決定的な変更を迫るものではないかもしれない。だが、それを編集者の活動についての綿密な調査・考証に接ぎ木することでブリッセは、状況の様々な制約を受けながらも、NRFにはポーランの言語観・文学観が反映されていた事実を鮮やかに論証している。作家ポーランと編集者ポーランの相互干渉が生み出す運動を捉えようとした点において、本書はポーラン研究に新たな地平を切り拓いたと言える。

註

- 1) Laurence BRISSET, *La NRF de Paulhan*, Paris : Gallimard, 2003, 457 pp.
- 2) 本書の結論でも、ブリッセ自身がノスタルジーを込めて以下のように述べている——「雑誌がある時代にしか価値を持たないとしても。その時代の骨組みを見いだすのに、雑誌ほど重要なものはない。書物は文壇の印象をこれほど打ち出すことはない」(*ibid.*, p. 422)。
- 3) *Ibid.*, p. 157.
- 4) *Ibid.*, p. 259.